

久保屋の話（四話） = = = 三州横山話より

五〇里を一日に歩いた男

長篠村字内金の久保屋という家は今もありますが、この家の先代の主人は、体格も特に勝れていたそうで、道を歩くのがことに早く、商用で、長篠から名古屋へ二五里の道を、一日に往復したといひます。その当時を記憶している者の話に、三度笠を胸にあて、その笠が下に落ちないぐらいの早さに歩いたといひます。この人には種々変わった話があつて、次のようなこともこの人の代のことだそうです。

ないものなしの店

この家は万（よろず）雑貨商で、主としては米の売買をやっていたそうですが何品によらず、お客から尋ねられて、ないと言うことが嫌いだとあつて、如何なる品でもないのものはなかつたといひます。

それについての話ですが、あるとき近くの作手村で、大神楽の獅子の面やその他の付属品が入用とあつて、村の総代のものが、はるばる名古屋から大阪まで尋ね廻ったところが、そんなものの出来合はないと断られて、帰途再び名古屋の商人のもとに立ち寄ると、もしや長篠の久保屋という家には持合わせがあるかも知れないが、もしそこになれば、たとえ江戸まで尋ねてもないと教えられ、半信半疑で帰ってきて、久保屋を尋ねると、幾組御入用かと訊かれて、面喰つたということです。事実この家には三組まで揃つてあつたといひます。

村のものなどが買い物に行つても、品物は一つずつ蔵から出して来て見せ、これでは少し小さいなど言おうものなら、度外れた大きなものを出して来て困らせたそうです。あるとき、夕立に遇つた男が、傘を買いに飛び込んで行つて、出して来た傘をみて、今少し大きい奴が欲しいと言つたため、直径が二間もある大傘を出して来たので、困つてしまつて、これはまた少し過ぎると言つと、そんな勝手を言う人には売りませんよと言われて閉口したという話があります。傘に限らず、何でも度外れた大きなものから豆のように小さいものまでことごとく用意してあつて、奉公人がまたこの主人の変わった気象をよく受けていたそうです。

日本三家

この家がまた図抜けて大きな建物で、やはりその当時の主人が建てたものだと思いますが、村のものが、日本に三つの大きな家があると言つて、日本三家の一つだなど言つていました。屋根の鬼瓦の高さが九尺あつて、これを屋根へ載せたときは、二尺角の櫻の柱が曲がつたなど言ひました。この鬼瓦が、川

を隔て、八名郡の小川村の、菅沼という家の鬼瓦と睨合っていて、菅沼家の鬼瓦が負けてその家は絶えず病人が出来て、ついに没落したなどと言う話もありました。

この人は長篠から、北設楽郡の川合へ通ずる四里の道路を、独力で開拓したということです。



玖老勢のやまびこの丘に展示されている望月家（久保屋）一の蔵の鬼瓦

現在は JR 飯田線と国道 151 号線が久保屋の敷地を貫通しています。右は旧国道、その先が施所橋・左手は飯田線がある。

現在残っている土地だけでもかなり広い。往時はこの付近一帯は全て久保屋の土地だったとのこと



施所橋の傍にある道路の竣工記念碑（明治 19 年）

久保屋は屋号で苗字は望月と言います。長篠望月の本家は望月清重さん宅で、久保屋は九代（約 270 年）ほど前に分家したとのこと。こんな田舎に何故そんな大きな家があったのかと不思議に思って尋ねたところ、この辺りは明治の中ごろまで、豊川を舟で運ばれてきた物資がここで陸揚げされ、伊那街道を通り飯田へと向かう物流の拠点であったそうです。久保屋は言わばミニ廻船問屋だったのです。飯田線が開通し道路が整備され、物資の輸送が陸路中心になると、久保屋は急速に衰えていったものと思われます。

長篠から川合までの道路は、地元では望月街道と呼ばれ、昭和 38 年に国道が改修されるまで、交通の要として供用され人々に愛されてきました。

俵に入れたヒョーソク（乗燭）

先代の没後、現今の主人が家政を整理したとき、蔵に幾十年となく納めてあった品を、ほとんど売り払ったと言いますが、今日は瀬戸物、明日は傘の日という具合に、一つの品物を朝から晩まで売ったと言います。酒樽などは、同じような樽を、三日も続けて売ったと言うことでした。

数年前私がこの家を訪ねたとき、店に（現今の店は、昔の物置ということです）昔女が髪油の容器に用いた陶製の油壺が、ずっと五十ほども埃に埋もれて並んでいるのを見て、珍しいと言うと、まだ蔵にもありますからといって、見せてくれましたが、俵に入れて昔のままになっていて、傍らに、燈明に使う乗燭が、これも俵に入れて三俵ほどありました。

六、七年前、現在の主人が県会議員の候補に立ったときの話に、投票の前日運動員に出した提灯が、何百張となく全部同じ形で、それがまた同じ時代に張り替えたらしい古さであったと言いました。この提灯が、相手方を圧迫して勝利を得たなどと言いました。



ヒョーソク（乗燭）

灯火器には色々な種類がありますが、やきものによるものでは、瓦灯（かとう）、短檠（たんけい）、乗燭（ひょうそく）、燭台などがあげられます。このなかで短檠、乗燭は油に燈芯を灯すもので、色々な形状のものが現存しています。電気のない頃の照明としては、蠟燭とともに代表的な灯火器でした。油は種油などの植物油が多く用いられたそうですが、今の時代で再現するにはサラダ油などの身近な油で充分点灯できますが、くれぐれも灯油やガソリンなどの揮発性のものは絶対用いないでください。燈芯は燈芯草というイグサの一種の芯を乾燥したのを使いますが、いまではなかなか手に入らないものですが、茶道具屋さんなどにおいてあることもあります。